



竹源

監

本

中村俊定文庫  
文庫 18  
328  
1



藍染北屋米山翁著

神儒佛醫

詩詞文章

鼎州

叢林

# 雜書囊

故事類

物語雜談

書賈 江都日本橋春秋堂板



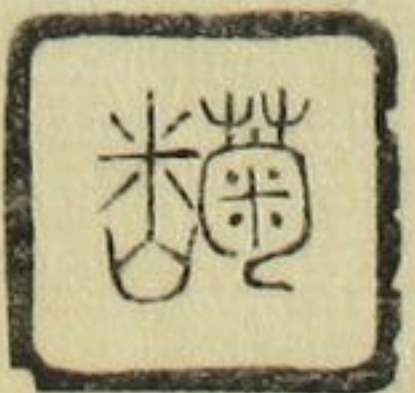
林淡如

萬葉集ハ古詩也然レ里古今集ハ唐詩に似テ  
伊勢物語ハ豪風ノ精液を以テ源氏物語ハ  
莊子ト天台抄書ヲ似テ心ノ口是ナリ  
高麗ノ連海ハ排指ハ江ノ酒白ノ酒指ハ  
似ルモノトシテ其似ル所を志シ高山ハ  
登ルモノトシテ天ノ高キ事ヲ志シ  
高麗ノ深キ事ヲ志シ先王ノ道ヲ聞  
ク終ル學問ノ大ナル事ヲ志シ



身をいへん心も著<sup>ツキ</sup>四支も布<sup>シ</sup>勤教もあつる  
少人の学はよれ少く耳も今<sup>イマ</sup>の古歌古文も  
比<sup>ナ</sup>ある句いある事あり今此の海波のあり  
飛波津はよしあを海するよあは津中  
の周<sup>マ</sup>ある前<sup>マ</sup>の<sup>マ</sup>のあは津<sup>マ</sup>のあは津<sup>マ</sup>のあは津<sup>マ</sup>  
かゝあつた<sup>マ</sup>のあは津<sup>マ</sup>のあは津<sup>マ</sup>のあは津<sup>マ</sup>

采山沾涼自叙



藻塩袋之一

四季混雜

社頭梅	露沾	飛梅	合歡堂沾徳
山楼	琴月	木枯	丹鳳樓雨夕
名月松	藍田魚道	落花見袖	坂上八十店
七夕後朝	白雲嵐沾川	菊花不散	萩原牛
貸砧	板倉連国	靈祭	琴調堂貞鶴
武野月	采山沾涼	宇治汲鮎	岩田涼之

宇治名月	田部井立元	隱家葛蒲	嶋野壽躰
繼穂梅	田中可播	卯月玉水	菊岡紀之
黒塚菴	服部涼佐	初雪	采山沾涼
龍田紅葉	晴行舎布仙	堀江螢	北梅市有佐
曉黃菊	松月堂千翁		



藻塩袋之一

菊岡采山著

石摺乃百の色者や此は也 露沾

天満宮百枚奉納の巻頭

松梅は此の神の古巻をいへりてとるなり此巻に  
 〇北野宮の人王六十二代村々帝天曆元年六月九日に遷座  
 此の神三座東の間の中杉友乞菅神の嫡男し中乃間ハ  
 菅穂相道真云西の間の吉祥女乞川菅神の正室なり  
 〇この巻の女乞の事と云ふ一伝西園寺家の女乞  
 〇云都乃西園寺菅穂の室に住居せしとる吉祥女乞  
 〇菅穂の室に東寺四塔此神なり

○菅神、菅原是善公の四男にして、養和十二年の誕生、俗に  
 天より降りて、所をくわふ形、其祖、天徳日命十四世孫  
 野見宿禰坐仁天皇の時、中土作の姓を賜ふ、其末孫  
 土師古人、同道長光仁天皇の時、土作を改めて菅原、其姓を  
 賜ふ、桓武天皇、乃時土師、每人に秋條の姓を賜ふ、又菅  
 原真仲、土師、菅原子勅して、其姓を改めて大いの姓を賜ふ、  
 世々、好守り、名、菅原、家に家系、○土師、古人の子、菅原公と云ふ、  
 子、是善、女、元、菅神の父、大系圖、西保親、王子、音人、姫、賜、天、河、  
 姓、トアリ  
 ○菅神、昌泰四年、正月廿日、九州大宰府に在、近江、  
 延喜二年、二月廿五日、歿、所、おろく、葬、是、于、時、五十九歳、  
 帝、哀、惜、由、一、延、長、元、年、以、方、逆、の、宜、旨、と、授、く、中  
 の、后、子、優、さ、し、正、二、位、を、賜、く、○、朱、雀、帝、天、慶、三、年、  
 七月、子、菅、原、七、条、の、塙、文、子、と、く、少、男、子、從、く、く、少、男、

右邊の多物に、撰、一、同、九、年、以、列、比、良、社、の、祢、宜、良、權  
 以、從、り、て、い、く、少、男、に、お、ろ、く、一、夜、子、千、株、の、ね、生、せん  
 々、布、の、社、と、そ、く、云、居、大、神、と、名、ひ、一、と、し、文、子、は、お  
 成、り、し、靈、符、と、經、管、と、名、系、所、捕、云、寫、く、神、徳、と、多、ひ  
 所、に、室、敷、と、造、り、し、菅、公、逝、去、より、五、十、六、年、後、天、徳、二、年、  
 同、年、九、月、禁、裡、回、祿、に、圓、融、院、の、朝、を、お、て、焼、失、救、  
 あり、新、殿、天、井、の、板、を、一、夜、蠹、蛀、の、文、字、わ、り、即、お、初、  
 物、と、し、又、も、燒、ぢ、ん、菅、原、也、と、記、す、事、の、わ、り、ん、か、ら、い、  
 因、茲、少、男、宮、に、お、ろ、く、天、子、の、道、管、と、し、

○一条院正暦五年二月、宰府安樂寺に、勅使、ふ、り、大  
 政大臣正一位贈官、と、く、于、時、今、く、皇、基、と、後、し、  
 あり、と、り、三、才、回、會、○御、述、作、物、菅、家、御、集、目、菅、家、文、章、詩  
 菅、家、後、集、詩、文、菅、家、萬、葉、詩、哥、文、德、實、錄、撰、之、菅、公

其序ヲカキテ  
類聚國史二百卷 日本記ヨリ三代實錄ニテノ夏ヲアソ  
クテ類ヲ分テ見ヤキヤラニアリハカ  
レタル

書ナリ 文選文集ノ点管公付サセ玉フナリ

○本朝文粹大江匡衡曰天滿自在天神或鹽梅於天下  
輔導一人或日月於天上照臨万民就中文道之大祖風  
月之本也

○某唐集 贈友古長京少燈社五首子 神祇  
松之入の本の君のゆる 神徳也 風と月とのつらうん

奉納 天満宮

梅子飛よ田くし溝くし紙屋川 沾 徳

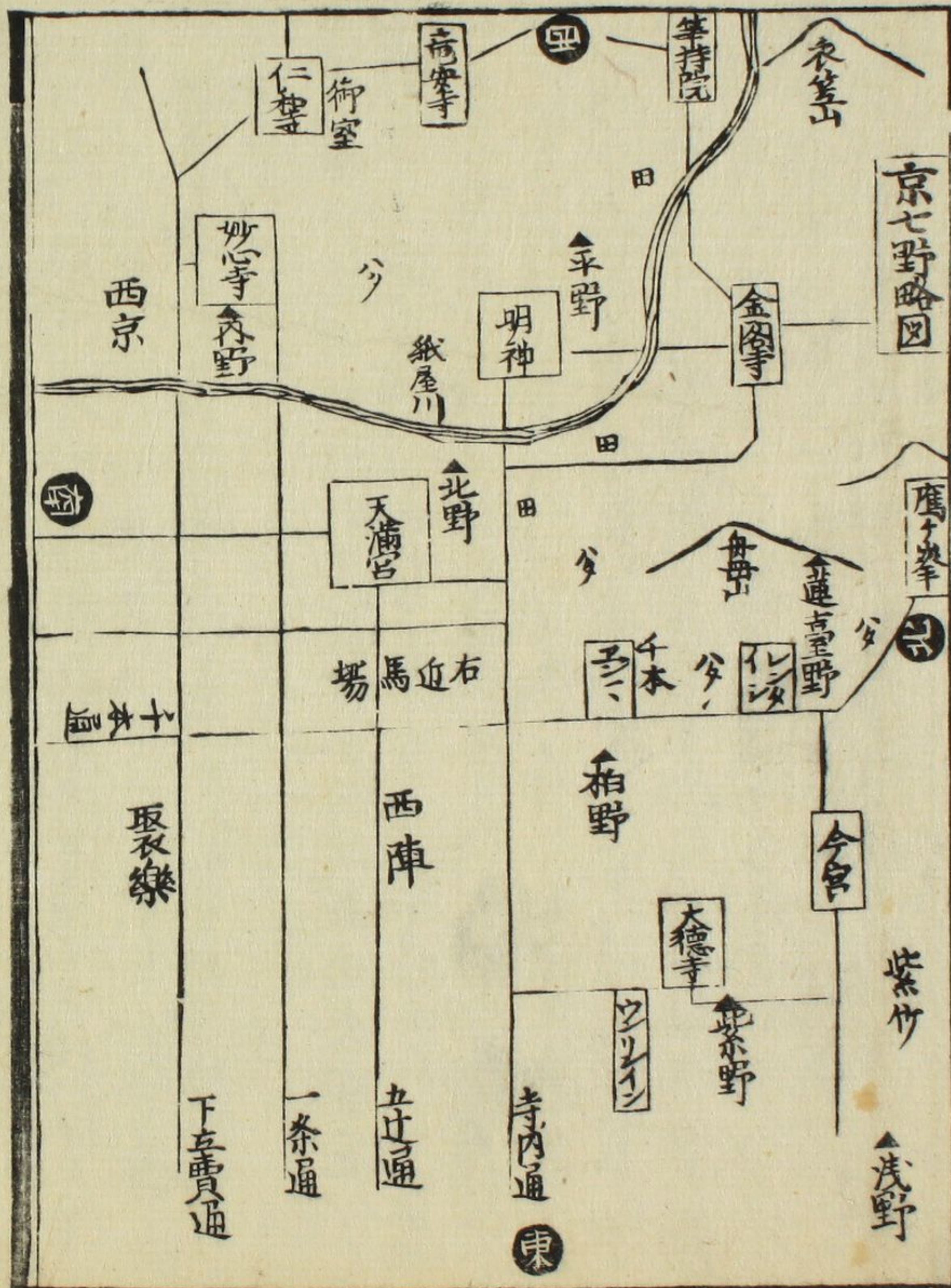
○拾遺集 かつらこれゆる時奈乃梅也と云えゆる  
を海本も白の梅と申す梅の花ありたけしを衣をす  
きこのは縁く せよ云梅飛て祝詞のを子生れと

在凡さよの身をまをさきけの都とのけはくさ  
けらあひて後よの紅梅後の河をくしにむかひて  
ゆき雲のそれのあつ世なりせばよむひしはを紙を海  
とをさきあひしよりまをるかた本

先父於故宅。廢離於父年。廢席於佳期。每至又有花のく  
りたるものこそあつしとわらふともかみりもあまね 古著書

○紙屋川 小野と平野の君あり小川くし水上の末村の  
より下ハ西津川系吉祥院の室を流るく下を舟よかれ  
流川よ入し小野の蜀に紙紙村あり古は川を製紙よ  
つく紙屋川よりくし紙の色くまをく口宣倫有あまひ  
らうし紙くし故子信よとまの倫有とま

○古今集物名 かまやふ 紀貫之  
くまのあまかまやふらん鏡はうけあまのあま



日に惚ておそく今宵のきりぎりすの音に

琴月

○懐拾遺集 冬月より春月迄のうららかなる日のもも

つゆり雪のふりぬる

○日集 雪のふりぬるは、きこえわたりさうぶのこも

日もあやうかのり雪のふりぬる

○草菴集 雪のふりぬるは、きこえわたりさうぶのこも

のり日なり

○徒然草云 家にあつた本は松檜松の五葉もすくはに  
ひとあやうの八葉はくはなまはるの秋のこもり雪のふりぬる  
はこもり雪のふりぬるは、きこえわたりさうぶのこも  
雪のふりぬるは、きこえわたりさうぶのこも  
雪のふりぬるは、きこえわたりさうぶのこも

乃つて... 十略 ○草山集云 金龍寺見花  
山花幽趣別 何意容成 群天暖 現香雪地 靈生瑞雲 俗  
者寂 僧厭 醉醺 日暮人歸 去鐘声 獨自聞

○王荆公山櫻詩 山櫻抱石 蔭松枝 比並餘花 開最近  
只有春風 嫌寂寞 吹香渡水 報人知

○山... 万葉集... 万葉集... 十八家持

○老子翼云 謂有不可謂無 不可故以恍惚名之  
又云 惚恍者 出入变化 不主故常之謂也

○正韻云 恍惚微歛 不測自 以上老子注

### 古拈也 葉人吹 蒼々 青風 丹恩樓 雨夕

野... 乃色... ○拈... 一... 是... 十... 十... 十...



とわらふまじりていともわらふまじりて ○五十首如哥 道遠院

○碧もひも吹はくさる本指す物も風のそとさびしき

○五雜俎云風之微也一紙之隔則不能過及其怒也拔

木折屋掀海揺山天地為之震動日月為之蔽虧百物之

生非風不能長類而及肅殺收成之者亦風也矣

○草庵集ふいふれきゆあすの秋の色派のそとさびしき

水菜いあの中の圃に蔓著と我て水菜とくく其冬葉甚

脆く柔くして其美し洛不東寺出郊と上りんは

或陽葛西の夜に水菜をわくとして洛の水菜をよきと

○本綱云蔓薑九十月下種生葉形色微似白菜冬春採

蔓心為茹此菜易起薑分枝必多三月則老不可食用小

黄花四瓣如芥花結莢收子亦如芥子矣

○為雅行旅詩 曉入長松之洞 巖泉咽嶺猿吟  
夜宿極浦之浪 音嵐吹皓月冷 注云音嵐八月晴嵐

少いまゝて及のめりて蘇やうんそくしりひるき  
うらやまのよとありらうそくしりひるき  
松のけいし晋子句とおとひて

名月や故人のうらやま松は影 魚道

○新拾遺集 名月や故人のうらやま松は影

名月や故人のうらやま松は影

○良夜 名月や故人のうらやま松は影 其角

○清嚴茶話云 奈良一乘院清門主の慈徳和尚が

舎より八月十五夜夕も志多く中門よりいそひけりお

もは力共あつて 庭を掃くより傍家とらいつり今宵

慈法坊の事よまをせ流るらんこのひあひまきうーやれおは  
 慈徳和尚のうく状とをきうーやりの思あつとまきうー  
 又か後と流るる言ふもわは一山の貫首三千の棟梁にこそ  
 けりまをせま真言止觀の玄宗とこそ観仰もせよと奥りもあ  
 りまきうーま八日夜佛目の盛とて祝ひ流るるの款門の義は  
 背き還る凡俗の弊に著せしむるまきうーま切舟なきい沙  
 室にけりつひぬ奴亦去來の月には流るるのうのり沙法は流る  
 天下のとのひひさしとて推量はりまきうーま向なるは流る  
 こそ一登りへしとて存心と教訓の状とまきうーませしむる  
 慈法坊の事よまをせしむるまきうーま奥りもあ  
 皆人まきうー川の癖にわらもたれ我にけりまをせしむるま  
 とわをせしむるまきうーませしむるまきうーま主とてこのかきうー  
 又まをせしむるまきうーまかきうーま止流るまきうーま

とわのちりけり流るる人せよと

袖に尺花ありわら流るる 八十店

○續千載集 袖のうまわぬ色くんとぬをまきうーまきうーま

まきうーまこれ乃とてまきうーま 西屋まきうーま大政まきうーま

○金葉集 ぬきうーまきうーまきうーまきうーまきうーま 袖の  
ぬきうーまきうーまきうーま 友原永実

○東坡詩集 三月二十日開園

西園牡輪夜 況々 尚有遊人臥柳陰  
鶯啼覺來風露下 落花毛絮滿衣襟

○梅之文事子云海あきまのめまらうくまきうーまきうーま  
流るるにわらうまきうーまきうーまきうーまきうーま  
まきうーまきうーまきうーまきうーまきうーま  
まきうーまきうーまきうーまきうーまきうーま

新編入交

死の者よと云ふ神まつりしは世をあらまのこいりやとあんな  
とあはれとてとくしりしうもとてそのひねひは車かゝるま  
はしくあひひて

あつととあつの人ますらそん死のあきまきそてかえり君  
はすけりなす終とかい母年しきむれをまきしり

○自後秋云寂蓮法師

ちりまそりあまれくこの世あは死のあやしくまのひはせ  
は身いん度わぬやうにいやめいとちあつなり心りくむ  
ちりそそく物あつたあのをとなくひ風の又あきそくちをそ  
つてくるさぬ死のあをくもるやうあまを押しあつて  
あそこのくこのいそれあんな凡の家くこのこそそくみん  
ゆれといふかいらそそく

七夕乃浮本和 猪牙の期度り 沾川

○夫本集 うさなわとて星にも人いあひまなり

あひあまかすあまのそもくぬ 後忠

○実方家集 あまの川かろくたあまこくつらん

とみけらのまきいりちちやらうまや

○漢武帝張騫よ天の川の源ときりあむ浮本り  
あまう牽牛図にゐる七夕の河名こくたあまをいん  
寒いしく漢帝乃役とて水源をきりひるこし織女云  
きりひるち浮へいすまらぬゆりや漢帝いゆまゆ  
事と浮よそのまきしとをよる七夕のほくこのこくた  
せくち揚ぐかえりていよりと奏するに帝伝をいり  
存とる捨あつてとるど東方翔てけられを織女の核との

ふいふよき事あるそとらふに帝信し給ふし 漢書見

○七夕好期 光明院貞和四年七夕法會隆清期長

あはれなるやすの舟のつぎをさすく引とあぬ列をさるらん

○著聞集云 家隆源七十七にあはれさすける年七月七日に

九條より大長のをやうつりける

おとひきや七十七の七月のをよの七日にあらんものこい

○杜子美東樓詩

傳西声ヲ看<sub>レ</sub>驛<sub>一</sub>使<sub>ヲ</sub> 送<sub>レ</sub>節<sub>ヲ</sub>向<sub>レ</sub>河<sub>一</sub>源<sub>ニ</sub>

○猶<sub>キ</sub>方<sub>ハ</sub>三<sub>ノ</sub>谷<sub>ノ</sub>私<sub>ノ</sub>多<sub>ク</sub>の曆<sub>ノ</sub>あ<sub>リ</sub>押<sub>送</sub>りの長<sub>吉</sub>と<sub>リ</sub>妻<sub>舟</sub>と

茶<sub>碓</sub>の<sub>こ</sub>ら<sub>し</sub>子<sub>作</sub>り<sub>魚</sub>荷<sub>と</sub>積<sub>く</sub>押<sub>す</sub>子<sub>至</sub>つ<sub>く</sub>も<sub>年</sub>一<sub>乞</sub>と<sub>考</sub>

支<sub>國</sub>指<sub>笹</sub>屋<sub>利</sub>を<sub>清</sub>浅<sub>草</sub>見<sub>付</sub>の<sub>至</sub>度<sub>勢</sub>又<sub>清</sub>と<sub>の</sub>よ<sub>三</sub>谷<sub>舟</sub>の

宿<sub>あ</sub>せ<sub>と</sub>仍<sub>る</sub>は<sub>舟</sub>の<sub>権</sub>與<sub>し</sub>ら<sub>ゆ</sub>た<sub>舟</sub>の<sub>長</sub>吉<sub>舟</sub>の<sub>略</sub>と<sub>傳</sub>し

秋<sub>の</sub>才<sub>の</sub>つ<sub>ら</sub>し<sub>子</sub>知<sub>る</sub>い<sub>し</sub>子<sub>辺</sub>羊<sub>猶</sub>方<sub>の</sub>二<sub>字</sub>と<sub>并</sub>れ

敷<sub>ぬ</sub>の<sub>を</sub>よ<sub>り</sub> 權<sub>の</sub>せ<sub>し</sub>菊<sub>の花</sub> 涼<sub>牛</sub>

○夫木集十四 拈<sub>ぬ</sub>り<sub>こ</sub>し<sub>ち</sub>く<sub>も</sub>拈<sub>ぬ</sub>り<sub>や</sub>ゆ<sub>らん</sub>

ゆ<sub>く</sub>く<sub>え</sub>の<sub>き</sub>く<sub>い</sub>く<sub>衆</sub>と<sub>ら</sub>なり

○古今集 人の<sub>を</sub>裁<sub>り</sub>菊<sub>の</sub>む<sub>ら</sub>の<sub>け</sub>く<sub>極</sub>せ<sub>り</sub>に<sub>葉</sub>草<sub>は</sub>た

く<sub>く</sub>く<sub>く</sub>の<sub>秋</sub>あ<sub>き</sub>の<sub>時</sub>也<sub>ゆ</sub>ら<sub>ら</sub>ん<sub>花</sub>と<sub>ち</sub>ぬ<sub>縁</sub>と<sub>ふ</sub>の<sub>や</sub>

は<sub>よ</sub>云<sub>極</sub>く<sub>人</sub>た<sub>く</sub>も<sub>秋</sub>あ<sub>き</sub>の<sub>時</sub>也<sub>さ</sub>ら<sub>ん</sub>花<sub>の</sub>い<sub>ら</sub>も<sub>く</sub>

も<sub>根</sub>ら<sub>自</sub>す<sub>り</sub>き<sub>こ</sub>の<sub>里</sub>秋<sub>の</sub>あ<sub>ん</sub>く<sub>さ</sub>り<sub>の</sub>嘆<sub>へ</sub>し

し<sub>ま</sub>り<sub>秋</sub>の<sub>ち</sub>た<sub>河</sub>の<sub>嘆</sub>す<sub>き</sub>と<sub>云</sub>い<sub>や</sub>し<sub>ら</sub>あ<sub>く</sub>雨<sub>の</sub>し<sub>ら</sub>

は<sub>哥</sub>天<sub>和</sub>物<sub>語</sub>に<sub>在</sub>中<sub>ゆ</sub>に<sub>花</sub>と<sub>す</sub>り<sub>菊</sub>め<sub>ら</sub>れ<sub>さ</sub>な<sub>り</sub>ゆ<sub>ら</sub>ふ<sub>い</sub>

る<sub>の</sub>あ<sub>め</sub>り<sub>と</sub>わ<sub>り</sub>伴<sub>物</sub>結<sub>よ</sub>い<sub>び</sub>し<sub>あ</sub>く<sub>人</sub>の<sub>せ</sub>ん<sub>さ</sub>り<sub>く</sub>

き<sub>く</sub>く<sub>い</sub>け<sub>ら</sub>あ<sub>と</sub>わ<sub>り</sub>九<sub>番</sub>の<sub>舟</sub>の<sub>菊</sub>の<sub>ち</sub>ら<sub>く</sub>よ<sub>み</sub>い<sub>は</sub>け<sub>く</sub>

と<sub>く</sub>く<sub>く</sub>と<sub>云</sub>り<sub>夫</sub>花<sub>用</sub>之<sub>語</sub>と<sub>ふ</sub>貴<sub>と</sub>い<sub>は</sub>ぬ<sub>れ</sub>と<sub>く</sub>そ<sub>の</sub>い<sub>く</sub>



紀時文伴の色紙形どく時毛とあまへてはく夜く月とあ  
く川へき時やさあはんと海白糸いうと無事やうそたれね  
あまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあ

と縁とひ雅ありやいん時文口とく川志も時文の考くま  
くちんそと金けりよくあまへてはく時毛とあ  
は幸袋抄子ほあり

○撰集抄云々天網言経信八條の系に信經入るは有さう月の  
あまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあ

かまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあ  
く川志も時文の考くま  
は幸袋抄子ほあり

鳥とあまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあ  
く川志も時文の考くま  
は幸袋抄子ほあり

鳴人の何故も向の徳了つ里

負鶯

○一休和尚壺茶の歌 ぐらろの尻やあまへてはく時毛とあ

そはあまへてはく時毛とあまへてはく時毛とあ

○今昔物語 ころの比の山代あまへてはく時毛とあ  
は幸袋抄子ほあり



じき〜むらじ

野も空に花も散るゝわりの月

采山

○沱泐武野天與垣元政

○新古今集 此も忠いなりもひとりのよびさ〜

○ るものち〜るりの月〜 採政大政大臣

○袋草紙云俊細排片の表に水上月の舞と詠へてあると  
隣に田舎の兵士中門の多きや中よりてけりるをまき〜  
侍は後々自今夜の歌をこ〜つ〜ま〜りて〜  
侍の云真ある事〜し〜ん兵士極〜云ッ

あや〜〜や水も〜ん〜んかおひてすめる秋の月  
侍来ては〜と〜ス万人〜〜〜  
且つ〜〜者近出と〜云〜

鮎汲も通る月空流の川

涼之

○玉葉集 宇治川の流よありありと細あり

と〜と〜は〜は〜 信世入たな採政大臣

○実況云の流況云清浦城長壽乃のりさ〜と達若なり〜  
宇治は〜河水久流〜と〜と〜と〜  
未西ありてのら 中〜〜  
い〜世よありぬ〜のありと〜  
〜と〜と〜と〜と〜

○宇治川の其流至る店〜その中にも宇治を〜西の方より  
才三の柱の流也と特に務む〜と〜茶と〜人け  
あ〜と〜人〜茶と〜と〜水〜

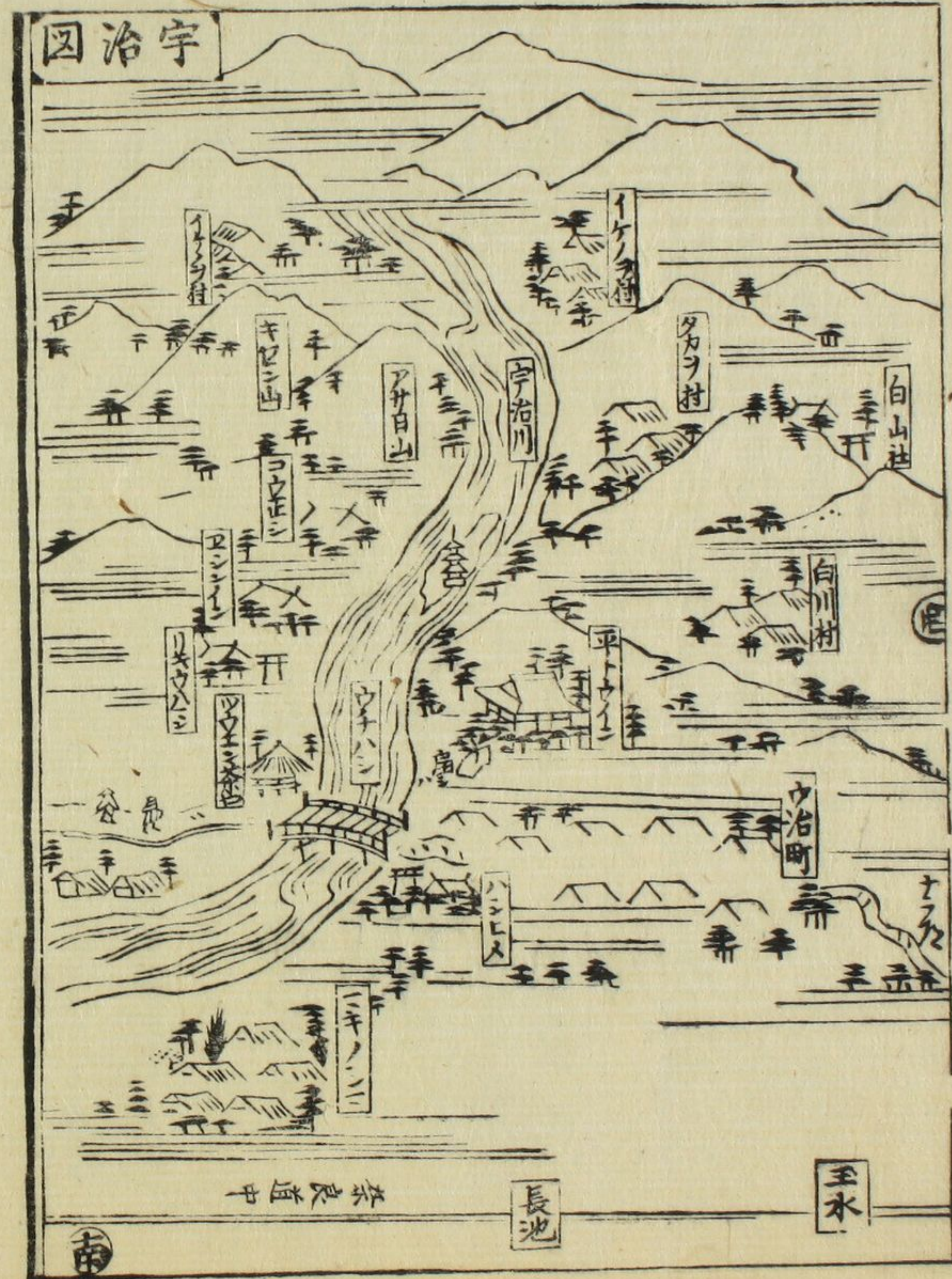
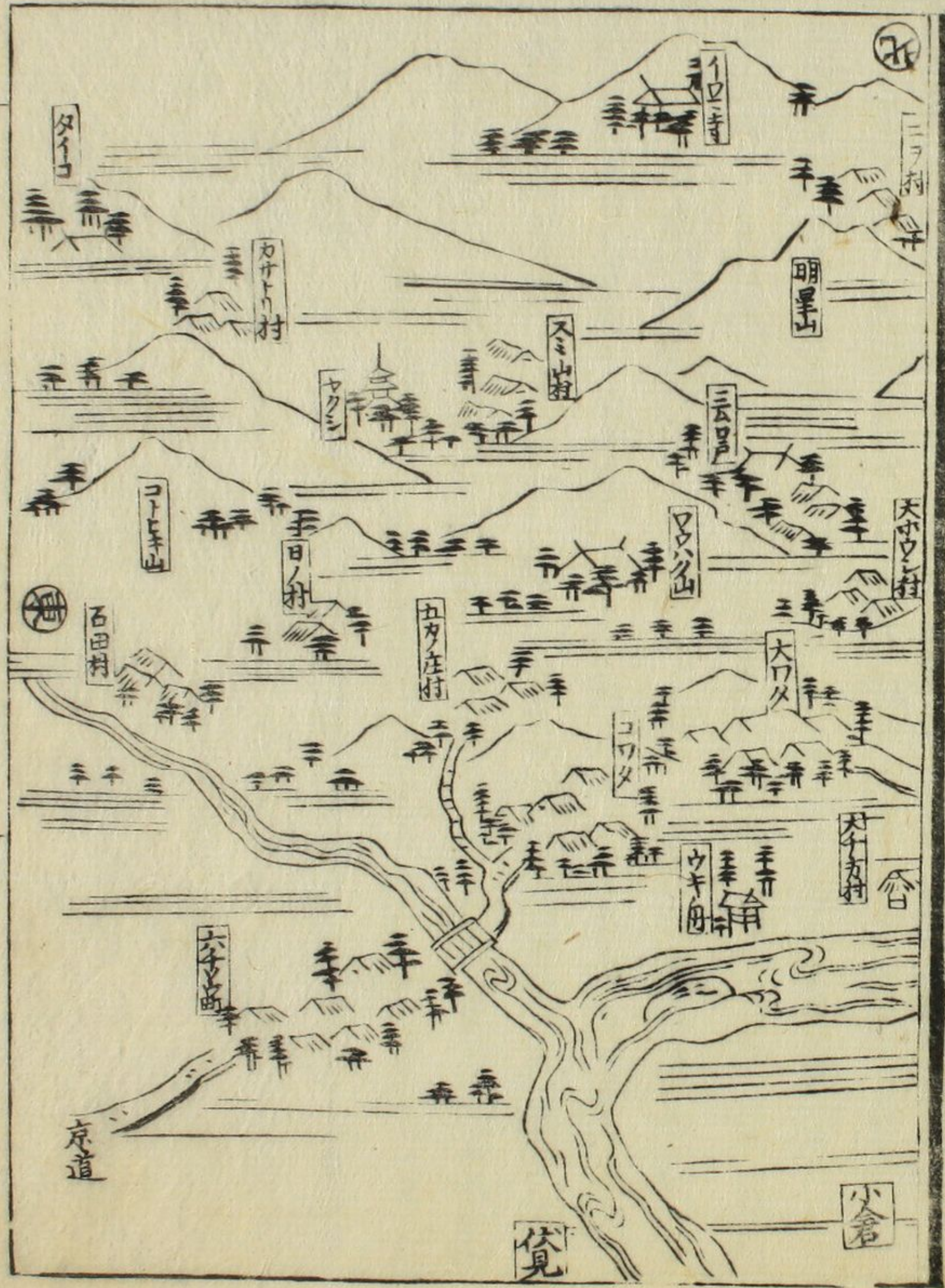
○通円茶屋び〜の橋階にあり近世西宗法師と〜茶店を





息男宇治関白頼道公永義七年捨宅為寺其結構泰中  
 華之模範堂象鳳凰形左右岡比兩翼後廊表尾是謂鳳  
 凰造○宇治関白頼通公平治殿となく其門の伎直を  
 まるしひはひやるおし一云任御奉もゆりる頼道云の日は  
 世ひ一河与ひの面をうらふし北よりか門を立す伎如  
 小に惣門あるややいと尋訪ひ一も和漢の才人  
 云任つえ悟をうりるもや江州のまゝの翳冠の時車  
 のまゝの同泰也と道はりる事やあつてつひはひ  
 江州云先我朝に六波羅密寺空也上人の寺淨土の西  
 秀例園師の寺天竺那蘭陀寺戒隄論師のまゝと云  
 ○徒然草云入宋汝門道眼上人六波羅の寺と云  
 と号すは唐のやまゝ一那蘭陀の大門の向なりと江  
 州といひつゝとれと西域傳法苑傳をくすも入る文  
 云云

年一江州のありてそまゝと云れんそまゝと云れん  
 西明寺のいひきり切端なりと云○江州の大江  
 院嘉祥元年六月の中徳と云ふ徳義元年九月大宰  
 権帥に依りて江州と云ふ江州江州の書に江州の  
 し才智碩学なるもの世にござるものなりは江州  
 の書に依りてと云ふものなりと云ふものなりと云  
 ○好中書王具平親王の書に依りて頼通公平治殿建  
 立の所堂中の扉に觀經の要文と色紙形に具平親王  
 といはれりて焼かされし具平の書も今に存す  
 ○此寺元ハ真言宗ノ天正年中玄發上人より永濟土宗  
 して知恩院の屬ス○尚院の鐘は青冑と云ふ三井寺  
 の鐘と云ふ一雙と云ふ○源三位頼政の御社扇の  
 芝草の形は頼政の畫傷手に  
 甲冑ホあるいなり











のし平々のんハシをヤリてししきるし今そ乃うを  
つふのあひらんよら子なんそとあふそととあひし  
○花嚴經云女人大魔王能食一切人英  
○宝積經龍猛大士云女人地獄使能斷佛種子外面似  
菩薩内心如羅刹然則於我門徒者眼不見女人  
あつてハ佛後子よりの女の鬼し

○奥列の馬塚の址ハ二本松とハ所目とのる舟引とのあふに  
ありまひのち子初の本ひきてあつり又奥列足立郡大  
宮の環の内子馬塚と称すり亦一森の茂りの中子ありは亦  
紀列那智の東光坊宿度叔孫悪鬼退散の地と云先年取ら  
徳がまよくと乃時那智ふまよく由緒とあるりよ寺記と書  
ころれ

其詞書曰

傳聞天台宗東光房阿闍梨宿度法印然墊那智山下濱

宮住侶西家三男也盖足立郡者光明房依為代々之且  
那所令下向此時大宮馬塚之惡鬼以法力令退散云

慶安壬辰曆林鐘二十三日

光明坊

古列足立郡大宮山東光寺ハ東光房草創しと云馬塚もは寺  
古列内ありびハ天名宗今ハ曹洞宗ハ那智より馬塚  
のちとの救あり又うとの物ハ奥列も各達ハ系列も足立系  
しとの並置の弄と根として宿度の子と傳りてなれと真列  
と武列と混合しとものとして云

○三才圖會云 液鷄又名其狀頭小而羽大有青褐兩種  
率以六月振羽作聲連夜札札不止其声如紡絲之聲人  
家粮箆暖則數年居

○新後探集 よもまきく 祢とてめくともまきく  
これありまよるめい持

三茶入内大臣



初雪ややくく土は流るるど 米山

○草菴集 カげくまきまをわき目のみくろく

おまへもなをのあまのまきくゆさ 新編

○枕草子云 雪のけしきもてはあまのこころのつらさなるひ  
のしみしきもてはあまのこころのつらさなるひ  
あまのこころのつらさなるひ  
あまのこころのつらさなるひ

○後拾遺集云 雪のけしきもてはあまのこころのつらさなるひ  
あまのこころのつらさなるひ  
あまのこころのつらさなるひ  
あまのこころのつらさなるひ

本之乃子神のそ津や龍田山 布仙

○新拾遺集 今も本井の中乃のるあつ

あつこのふれもつるあつ 人丸

○龍田社 和州平群郡祭神二座天、御柱、神因、御柱、神  
天武天皇四年辛小紫美濃王小錦下佐伯連廣足奉勅祭  
風神於龍田立野也伊弉諾伊弉册二神所吹息氣為神  
是乃風神男曰級長津彦命女曰級長戸部命所祭神異  
名同神也在伊勢新風宮 若宮 一座 三太神 三座  
滝祭神 一座 二神以天、玉兔、探下界所納神靈也

○龍田社、秋も月の造化の神、素老馬の沖女、抗津姫命、  
○佐保姫、武蔵司の造化の神、天、屋津姫命、又大屋津姫命、  
のふともすこのをの沖女、五十猛振命、抗津姫命、屋津姫命



○新編古今集 海なる龍の吐く波のよるあまの

志くすの波のうきやそあらん 蘇我政左大臣

○唐李季卿水蛭賦云彼何為而化草此何為而居泉

○本綱云蛭有三種其小而查飛腹下光明乃茅根所化

呂氏月令所謂腐艸化為蛭者是也

長如蛆蝟尾後有光五翼不飛乃竹根所化也 一名蠲

明堂月令所謂腐草化為蠲者是也 俗土蛭ト云

水蛭居水中皆感濕熱氣遂變化成形

○宇治拾遺云今むじうあつまうとの音むじうまのこころを  
がゆらるとんて

あまそらや虫のちや尻子火うきうき二人と海をくらふこころをそ

あつま人のやうよあんとてはあまのうきうきとあまのこころを

曉のをのまといかえる黄菊の歌 不角

○古今集 宛平の法時きくのむよのあせけむる 敏行湘良

久このむのうんきんきうの天は雲とあやまらんぬ

○奥儀抄云 かみもあまのいけふたぐのそくきくのまけり

まんなこのいのちのていさ けすかき有せうまのくい首菊し

春和のみしくよる川の鳥黄なる色とめぐるあひて菊も

美なるを愛し流ひけりしきくも春和菊と黄菊

りよし或わよハ一本菊とりなしさうまのこころをまげ

ことかあそられとまてこころをまげなるとまてこころを

なるる金やうを又黄菊のいろく菊もあひて

よあらんみよのあそらよまてこころをまげ

色のていさといのちのていさあまのこころをまげ



といふやふくまらざるを以て同云ふなりといふは、  
 こゝを以てして、  
 つくろふこと、  
 りあつたるといふは、  
 えゆりいふは、  
 ○江談抄云、  
 溪間ニ菊多シ其ヨリ流出ル寺僧門取ノ人此水ヲ吞  
 故長壽ノ者多シ矣 ○古今醫統云、  
 太密密則花頭小宜栽黃白二種可入藥秋後開花者公  
 佳家庭中植之甚有逸趣且兆吉祥以其晚節凌霜之操  
 非群花之可得而班也矣  
 ○程正叔視箴云、  
 還天理而見本心之誠、  
 菊の色のまじりたる色は、

